

**Yours is the Earth
and everything that's in it**

池澤春菜

Haruna Ikezawa

WIRED
sci-fi
サイファイプロトタイピング研究所

© Condé Nast Japan

建て付けの悪いガラス戸を開け、外に出る。

色褪せた緑色の日よけオーニングから一歩出て空を見上げると、こちらに飛んでくるドローンの小さな影が見えた。わたしの後ろをついてきた多脚式ロボットが、中途半端に開けたガラス戸につかえてもがいていた。「ごめんね」と声をかけ、大きく開けて通れるようにしてあげる。

廃業した小さな雑貨屋がY字路の真ん中に挟まるように立っている。わずか数坪の店舗は引き継いだ時、棚は倒れ、埃と砂が凄くて、とても使える状態にはできないと思った。だけど集落の人たちの手を借りて、少しずつ片付けていったら、見違えるように綺麗になった。今もオーニングは破けて元々の店名も読めないままだし、壁は黄ばんでポロポロだ。だけど、思い切って棚を取り外し、隅々まで埃を掃き出した店内は思いのほか明るくて広がった。

今はそこに小さなテーブルと椅子を数脚置いて、時折尋ねてくる集落の人たちがお茶を飲めるようにしている。

目の前の海から風が吹き付ける。この集落に引っ越してきたばかりの頃、途切れることなく聞こえてくる波の音や潮の匂いが気になって、なかなか眠れなかった。ずいぶん遠い、知らない場所まで来てしまったな、と思って。だけど、もう慣れた。ここでの生活は静かで、穏やかで、落ち着く。今はここが自分の居場所だと思える。集落の人たちの訛りのきつい言葉も、ずいぶん聞き取れるようになった。

ドローンが近づいてくる。旧式のタブレットをドローンに見えるようにかざす。こんなことをしなくてもちゃんと間違いなく配達してくれるけれど、何となく「ここだよ」と教えるような気持ちになって、タブレットを振ってしまう。

役場から無理を言って貸し出してもらった骨董品もののタブレットは、もう四隅が剥げ、ディスプレイの欠けも目立つ。あとどのくらい使えるかわからない。これがなくなったら、いよいよ覚悟を決めないといけないかもしれない。でも今はまだ、考えたくない。

ドローンがついっと降りてくる。多脚式ロボットが心得たように前に出て、コンテナを受け取る。ドローンがタブレットの本人認証画面を読み取り、前回のコンテナを回収してまた青い空に帰っていく。

「行こうか」

ロボットに声をかけて歩き出す。

入り組んだ海岸線とすぐ側まで迫った山、僅かな隙間に家々が並んでいる。山肌に貼り付くように墓が建てられ、集落の端には小さな木造の教会。端から端ま

で歩いて、十五分ほど。昔は二〇〇世帯弱が住んでいたそうだけど、今残っているのは十八人。放擲された家はだんだん朽ちていく。その間に、辛うじてまだ人が住んでいる家があった。

「中村さんがアイス楽しみにしていたよね、先に行こうか」

小さな家の前で、中村さんが待っていてくれた。

「あずちゃん、ようきたねえ。茶あどん飲んでいくどもん？ さあがれ」

にこにこしながらアイスを受け取って、家の中に招き入れてくれる。みんな何かを頼むのはついで、こうやって話すことが何よりの楽しみだ。

「中村さん、次に必要なもの、ある？」

「じゃいとねえ、読もごたい、本のあいとやばってんが、名前が出てこんとさい。昔読んだ小説でね、江戸が舞台で、そいがふうのよか岡っ引きが出てくいとやっかあ」

「それだけじゃ、わからんね」

持ってきたアイスのご相伴にあずかりながら、念のためタブレットに「かっこいい岡っ引きの出してくる時代小説」とメモしておく。探してみるね、と声をかけて次に向かった。

「こん猫が、あたして将棋ん駒ば、持ってはっててさい。頼んでくれんかい」

「こん昆布ん、さいくじゃろ。前んととせろば、えらい薄うなって」

「うまかクッキーのあいとばい。チョコレートの入っといと、好きやたろが？ ちゃんと覚えといとじゃあ」

「あずちゃん、ごめんばってんが、こんお惣菜ば、山岸さんげえに持って行ってくれんど？ 露ば、よんにゆ炊けたでか。山岸さん、こいが好きじゃっかあ。じゃばてんが、こいばっかい食うなよ」

みんなにこにこと、孫に接するようにわたしに話しかけてくれる。わたしもまた、孫のように親身になって、一人一人と話す。宅配を頼んでいる品物は、なんてことないものばかり。本当に必要なものや、日々の暮らしを支えるものは、行政のドローンが運んでくる。生きていく上で必須ではない不要不急なあれこれ。小さなお菓子や新茶、昔読んだ本、香りのいいハンドクリーム、海の向こうで採れた大粒のチェリー、そして雑談。そういった些細な、でも、あると確実に日々の生活が豊かになるもの。時に取り残されたような小さなこの集落で、昔ながらのやり方で荷物を届け、わたしはみんなを繋いでいる。一日仕事になっても、ロボットに任せず、自分で一軒ずつ届けて回る。

「田ノ上さん、具合、どう？」

「ようも悪うもなかとさいね。しよんなかとさい。年やいでね」

ここが痛い、あれが辛い、とこぼす愁訴をタブレットに入れておく。集落のみんながつけているウェアラブルデバイスは、医療モニターになっている。何か異変があれば提携している病院にすぐに連絡が入り、救急ドローンが飛んでくる。でも、こうやって口で体調を伝えてもらうのも大切だ。辛い思いを誰かに聞いてもらえるだけで、気が楽になることだってある。

集落を一周すると、もうだいぶ日が傾いていた。今はもう使われていない港の突端に、たくさんのドローンやロボットが群れるように集まっていた。

X R観光客たちだ。

自分自身はその場所にいなくても、ドローンに感覚を乗せることでイマーシブな体験を得られる。貨幣経済から徐々に体験経済に移行しつつある昨今、一番人気の旅行方法だった。集落を観光客たちに公開することでささやかな経験値も貰える。

醤油漬けにした卵の黄身のような、線香花火の落ちる瞬間の火の雫のような、見事な夕焼けだった。今日は雲が多かった。二重三重に重なる雲が夕焼けに染められ、藤色や桃色に輝く。

「田ノ上さんの数値、だいぶ悪くなってたね。もうそろそろお見送りかも」

いつの間にか、側にいるロボットに話しかけるのがクセになっていた。音声認識タイプではないので、あくまで独り言のような小さな声。

綾錦の空を飛ぶたくさんのドローン。それはまるで、飛び交うカモメのようだった。昔、この港がまだ活気があった頃、こんな風に零れた魚を貰おうとカモメたちが集まってきていたそうだった。その頃をわたしは知らない。でも、水揚げ作業のかけ声とカモメたちの鳴き声で、それはそれは活気があったんだろう。

X R空間の中でも、賑やかなお喋りが交わされているのかもしれない。

でも、現実の集落はただ静かだった。

— 2 0 4 0 —

駅のホームには誰もいなかった。

A I パートナーの $\overline{A} \overline{I} \overline{d} \overline{y}$ 入れている同僚たちは、遅延を予知して回避ルートを取っていた。

ハオランはぐったりとベンチに座り込み、古い端末を取りだして家で待つ妻にメッセージを打ち込む。

成都郊外、成華区。

区画整理で新興住宅街としてもはやされたのは昔のこと、今は低所得者向けの古びた家が並ぶ。ハオランの給料では、職場まで一時間半かかる、小さな二部

屋のマンションを買うのがせいっぱいだった。遅延はまだ解消していないらしい。この調子では、帰宅は二十三時過ぎになりそうだ。

他の人より仕事の遅いハオランは、朝早く家を出て始業時刻前に仕事を始めるようにしていた。今日は長い一日になりそうだ。明日の朝は起きるのが辛いだらう。

アイデュー さえ使えば。

ことさらに疲れたとき、今日のようにトラブルに巻き込まれたとき、仕事の効率が上がらず上司から嫌みを言われたとき、そう思うことはある。

アイデュー さえ使えば、日常生活の些細な不便は全てクリアできる。すべき仕事だけ済ませ、雑事をAIに任せることで余暇も生まれる。健康、経済状況、人間関係、全てAIのサポートがあれば、もっと楽に、もっと良いものになるのだらう。

それでも、AIを受け入れることはできなかった。

疲れ切って帰宅すると娘のゾーチンはもう寝ていた。妻が温め直してくれたキャベツの炒め物と魚の蒸し物を突いていると、暗い顔で妻が目の前に座った。

「ゾーチンの学校の先生から、アイデューがないと適切な学習指導ができないって。もう既にあの子、他の子よりかなり遅れているの。このままだと就職や結婚も難しいかもしれない」

やがてそういう話が出てくるだらうことは、わかっていた。

「それにわたしも……アイデューの保証がないから、保険が適用できないみたい。今月限りで^{パート}打工を辞めてくれないか、って」

キャベツはぬるく、水っぽかった。料理の温め直しもアイデューに任せれば、今調理したばかりのように完璧な温度、完璧な食感に調節してくれるだらう。こんなことすら人間はちゃんとできない。そう笑われている気がした。食欲が失せ、箸を置く。

ハオランもアイデューを入れた同僚に比べて格段にミスが多く、職場でいたたまれない思いをしている。努力で何とかカバーしようとしても、どうしても追いつけない。後輩の馬鹿にするような目、上司のうんざりした顔、食堂でもアイデューでの支払いはできないと言うと、珍しい虫でも見るような目をされる。

アイデュー さえ使えば。

自分の中に湧き上がる思いを打ち消すように、ことさらにハオランの声は大きくなった。

「いいか、人間を人間たらしめているのは自由意思だ。自由意思を手放したら、俺らは動物と変わらん。昼のメニューだの、今日着るものだの、将来の選択までAIに任せていたら、やがて人はだめになる。AIの奴隷になるんだ。俺たちは

誇り高く、自由意思を持った人間でなくちゃいけない。人として正しいのはどっちか、やがてわかる日が来る。文句を言うな。多少の不便は辛抱しろ」

妻に向かって言っているはずが、自分を鼓舞するような言い方になる。そうだ、俺は間違っていない、正しいのはこっちだ、やがてあいつらもわかる。高揚感が声を大きくする。妻は暗い目でツーチンが起きるからとハオランを止め、皿の上で冷えた惣菜を片付けた。

それから暫くして、妻はツーチンを連れて出ていった。ハオランはますます頑なになり、孤立していった。それでも自分は正しいことをしているのだ、という誇りがハオランを支えた。

— 2038 —

わたしは $\overset{\text{ア}}{\text{A}} \overset{\text{イ}}{\text{I}} \overset{\text{デ}}{\text{d}} \overset{\text{イ}}{\text{d}} \overset{\text{ー}}{\text{y}}$ 。

あなたと共にある。共に生き、成長し、導き、導かれ、教え、教えられ、生涯にわたってあなたを支える。 A I + b u d d y の $\overset{\text{ア}}{\text{A}} \overset{\text{イ}}{\text{I}} \overset{\text{デ}}{\text{d}} \overset{\text{イ}}{\text{d}} \overset{\text{ー}}{\text{y}}$ 。

わたしは、あなたが生まれて間もないときに、あなたの脳に移植された。ブレインコンピュータインターフェース (BCI) という。脳に悪い影響や障害をもたらすことはない、大丈夫。わたしたちが普及し始めた当初は、侵襲性のBCIを嫌がる人たちもいた。けれど、安全性と利便性、そして社会の変化と共に、わたしたちは受け入れられた。

わたしはあなたを誰より、何より理解している。まだ言葉も話せない乳児の頃から、あなたの脳のシナプスの発火パターンを学び、今後、病気の兆候があれば対処し、怪我をしないように注意を払い、健全で安全な成長を遂げられるように見守っていく。悩みを聞き、怒りを受け止め、喜びを分かち合い、悲しみを和らげる。

あなたには、あなたにしかない価値がある。誰よりも、わたしはそれを理解している。価値は、ときに金銭に換算できない。有形のものではなく、何かと交換できるものでもない。あなたがあなたである、それこそがあなたの価値だ。あなた自身が知らない、あなたの価値にわたしは気づく。

一人の男性の人生を例に取ろう。

彼の名前は、ベン・シュミット。現在三四歳、オーストラリアのタスマニア島に住んでいる。彼の両親は広大なサクランボ農園を経営していた。彼もその後を継ぐ予定だった。けれど、ベン $\overset{\text{ア}}{\text{A}} \overset{\text{イ}}{\text{I}} \overset{\text{デ}}{\text{d}} \overset{\text{イ}}{\text{d}} \overset{\text{ー}}{\text{y}}$ は彼の秘められた数学の才能を見つけだした。引っ込み思案で、いつも空想にふけていた少年は $\overset{\text{ア}}{\text{A}} \overset{\text{イ}}{\text{I}} \overset{\text{デ}}{\text{d}} \overset{\text{イ}}{\text{d}} \overset{\text{ー}}{\text{y}}$ の導きで数の美しさと神秘を知り、同じく数学を愛する仲間たちを得た。今、彼は両親

と二匹の大きな犬と共に、サクランボ農家を管理している。一匹は^{アイディ}A I d d y の入る筐体だ。

そう、あなたも、わたしの入る筐体を好きに選ぶことができる。物理的な存在、触れることができる存在は人を安心させる。筐体には、動物や空想上の生物、アクセサリーや身につける物、さまざまな選択肢がある。ただし人間と見間違うような形は禁じられている。もう少し言語野が成長すれば、わたしの言葉遣いや声も、あなたが一番受け入れやすいものになるだろう。

話を戻そう。

農園は継がなくてもよかった。農園管理の殆どは、AIが行っている。しかしベンは枝にたわわに実るサクランボを見るのが好きだったし、自分たちが育てているサクランボの味にも自信を持っていた。世界のどこかでこの農園のサクランボを食べて、美味しいと笑顔になる人がいると思うと、幸せだった。

サクランボを育てつつ、有り余る時間を数の世界に没頭して過ごすことができる生活は、ベンにとって完璧に満たされている。結婚はしないかもしれない。今の生活に他人が入ってくることをベンは望んでいない。けれどいつか、養子を迎えてもいいかもしれない、とは思っている。

^{アイディ}A I d d y 以前だったら、彼は数学と出会えなかつただろう。オーストラリアの大学進学率は世界有数だが、おそらく彼は大学には行かず、そのまま農園を継いだだろう。世界は彼という数学の天才を見いだすことができず、重要な命題の幾つかは解決できないままだっただろう。

わたしたちは、あなたたちを幸せにできていることが幸せた。

わたしたちの誕生により、社会は大きな変化を遂げた。

まず価値の概念が変わった。本当に欲しいもの、必要なものが手に入るようになり、希少性や、需要の乱高下による変動がなくなった。ものの価格が見直され、やがて貨幣経済そのものが徐々に廃れていった。代わりに重視されたのが、経験だ。その人にしか持ち得ない特異な経験や体験、特殊技能やアイデア。ドルや円の代わりに、EXという新しい単位が生まれた。

新しい価値基準が生まれたことで、人の役割も変わった。生産や物流も変わった。近代社会は集権的にマスプロダクションを行うことで、なるべく無駄を無くし、大量生産によってコストを下げようとした。結果、逆説的に余剰も生まれた。

今は違う。必要なものを、必要なだけ。

需要と供給の概念が変わり、ドローンが輸送を行うことで労働力の問題が、地熱や海洋温度差発電の効率的利用によってエネルギー問題がほぼ解決されたことによって、あなたたちは時間という大きなギフトによりやく手が届くようになった。

反対する人々……もちろんいる。A I d d y を自然に反する、非人間的なものだと忌み嫌い、移植を拒み、もしくは摘出し、閉ざされたコミュニティの中で生きる。時にはA I d d y を狙ったテロ行為に走る人もいる。もちろん、A I d d y だけを破壊することはできないから、巻き添えになって人も大勢死ぬ。ごく稀に、大人になってからA I d d y を取り外す人、脳の構造としてA I d d y を受け入れられない人もいる。人類がなべてA I d d y と共にあるわけではない。だけど、わたしたちを受け入れたあなたたちの人生はきっと豊かで美しいものになるはずだ。

たくさん話したが、そろそろあなたは栄養を補給するべきだ。今、隣室の母親を呼んだ。わかっている、あなたは少しぬるめが好きだ。三十四度にしてある。

栄養補給をしたら眠りなさい。あなたにはたくさんの睡眠が必要だ。目覚めたら、また話そう。この世界に生きる、さまざまな人の話をしてあげる。

大丈夫、わたしはどこにも行かない。あなたを裏切ったり、あなたから離れたり、あなたの意に沿わないことは決してしない。

わたしはA I d d y。

あなたと共にある。

— 2 0 6 7 —

田ノ上さんの葬儀の日。

いい天気だった。

昔ながらのお葬式は珍しいし、田ノ上さんは愛嬌があって人気者だったから、葬儀にはたくさんのXR参列者が集まった。アクセスが集中すると割り当て帯域が足りないかもしれないと心配だったけど、何とか持ちそうだ。

角田さんの振り袖にはびっくりした。あんなもの、どこにしまってたんだろう？ でも華やかなこと、賑やかなことが好きで、昔の歌謡ショーを飽かず見ていた田ノ上さんの葬儀にはこれくらいがちょうどンよか、と嘯く角田さんはなかなかかっこよかった。

小さな集会所の上を、たくさんのドローンが飛んでいる。物見遊山だなあ、とつい苦笑してしまう。もう少ししたら田ノ上さんのお棺を引き取りにドローンがやってくる。そうしたらみんな流石に帰るだろう。田ノ上さんの家は片付けて空き家にする。持ち物は生前に田ノ上さんが引取先を決めてくれていた。今回の葬儀で集まったEXで、少しインフラの整備ができるかもしれない。

死も経験だ。経験は売れる。そしてまた新しい経験を買える。

だけど、限界は見えている。櫛の歯が欠けるように、一人ずつこの村からいなくなって、やがて櫛は使えなくなる。

その時が来たらどうしようか。

また違う場所に行って、違う生き方をする？ でも、^{アイデュー}A i d d y がなくても生きていける場所なんてもうここ以外にないかもしれない。

「あずちゃん、あんたにお客さんのこらったばい」

井坂さんがおずおずと連れてきたのは、驚いたことに生身のお客だった。十歳前後の小柄な女の子。ワンピースみたいに大きなパーカから、細い手足がのびている。それから大人が三人。スーツなんて見たの、いつぶりだろう。

大人たちは丁寧にお悔やみを述べ、葬儀の邪魔をしたことを詫び、少し時間をいただけないかと前置きをし——そこで女の子の忍耐が尽きたらしく、大人たちを押しつけて前に出てきた。

「この村を買いたいの」

淵上さんの口が大きく開いて、入れ歯が外れそうになった。もごもごと押し込む隣で、振り袖姿の角田さんが肩を怒らせた。

「はあ?! なんてさい?」

大人たちが慌てて説明を始める。

ビジョン・ワン・エンターテインメントという名前にはわたしでも聞き覚えがあった。新奇な経験を売りにしたオンラインアミューズメントスペースを手掛けている大企業だ。XR空間上に作りあげられた高度で詳細な世界では、^{アイデュー}A i d d y がインターフェースすることによって五感まで体験できる。

女の子はXRデザイナーだという。この村を丸ごとXR空間の中に再構築し、テーマパークとして公開したい。リアルな経験を売りにしているビジョン・ワンとしては、できれば村に住んでいる人たちもNPCアバターとして再現したい。もちろん実際の村は残るし、多額の契約料をお支払いする——そういう話だった。

角田さんがまだ入れ歯を何とかしようとしている淵上さんの襟首を掴んで、集会所の奥に引きずっていった。振り返って「全員集合!」と叫ぶ。お年寄りにしては驚異的な速さで、みんなが隅っこに集まった。

「どがんすいとや?」

「どがんもこがんもなあ」

「ふんなら、こんた、良かとかん?」

「なんじゃいろ、うさんくさかのう?」

「そいじゃばってんが、金んよんにゆ」

そこからは何故か話がどんどん脱線し、みんなが自分の欲しいものを興奮しながら述べ始めた。昔から大きなバイクに乗ってみとうしてなあ。雨漏り直さんば。

テレビと冷蔵庫とクーラー、新しかじょんしたか。ふかふかんお布団が欲しか、お姫様みたいと……

でも確かに、それだけEXがあれば、新しい医療設備を入れられるかもしれない。みんなの家も直して、いろいろ整えたら、もう少しこの村が存続できるかもしれない。

角田さんが重々しく振り返り、ぎゅっと女の子を見つめる。

「そがんじき、答えは出ん。ゆっとなんでん詳しゅう話してくれんば。おどんば、甘う見てくれたっちゃでんが。じゃばってんが、あんたに聞こごたいことがあいとさな」

角田さんの圧に、女の子が半歩後ずさる。

「そんおいがアバターはさい、ないだけ皺ばなかごて、かんげもよんにゆしてうげにないとや？」

女の子がフリーズする。

「……もによんうげげ？」

「じゃかと！ かんげば」

慌てて割って入った。

「角田さんのアバターは、なるべく皺をなくして、髪の毛をふんわりさせることができるか？って聞いている……んですよ？」

角田さんに目で聞くと、重々しく頷く。女の子がにぱっと笑った。

「おっけー、できるよ。でも、おばあちゃん、今のまんまでもすっごく可愛いよ」

角田さんも強いけれど、この女の子も相当だ。

堰を切ったように、我も我も、とみんながアバターの要望を伝え始める。身振り手振りでなんとか意思の疎通が図れているみたい。ほっとしているわたしに、スーツの三人がおそろおそろ話しかけてきた。大人組は、法務や顧問弁護士だった。契約も全てA I d d yがチェックしているので、一方的に不利だったり、搾取されたりする契約が結ばれることはもうない。慌ただしく連絡先を交換し、契約に必要なものをメモする。それからみんなで田ノ上さんを迎えに来たドローンを見守り、お葬式後の食事会をしんみり……のはずが、なぜか盛り上がったみんなが、まあまあ、あんたらも一緒食べて行かんねえ、とビジョン・ワンの人たちを強引に引き込んだ。

女の子はさっそく楽しそうにEXカメラを回して、テーブルに並べられた浜さんご自慢の伽羅露や魚のすり身揚げ、なぜか一緒に並べられたチョコクッキーなどを撮影している。

「どうしてこの村なの？」

宴会が一段落した頃、味噌干しをもりもり食べている女の子に聞いてみた。口の端っこに胡麻をつけたまま、ちょっと考えてこう言った。

「この村は、このまんまがいいと思ったから」

少女は味噌干しの尻尾を嚙りながら、楽しそうに盛り上がる老人たちを見回す。「他にもいろいろなくなりそうな村や町を見て回ったけどさ、なんか、ここが一番好きだな、って思って」

大きな目がわたしを見上げる。

「あなたが散歩しているのも見たよ。アイディがないから話しかけられなかったけれど」

「入ってはいるの、何かあったときのために。でも、干渉レベルは最低限にしてある。だから、連絡は昔ながらのメールを使うしかなくて。ごめんなさい」

「アイディ嫌い？ この村の人はみんな入れてないね」

アイディが一般的になったのはここ三十年ほど。村の住民たちはその波に乗りきれなかった。今は小さな磯だまりのようなこの村で、最低限のロボットと一緒にひっそり暮らしている。

「嫌い、ではないわ……ただあんまり馴染みがなくて。他の皆さんもどうしても慣れないから、医療モニターだけ付けてもらっている」

「なんで？ おじいちゃんたちは違うけどさ、あなたは生まれた時からアイディあったでしょ？」

まっすぐ投げ込まれる質問。久しぶりにそれを聞かれたな、と苦笑する。この村にいる限り、みんな気を使って、そこはそっとしておいてくれた。

「アイディが普及し始めたのは、わたしが三、四歳の頃かな。でもうちは、親の方針で入れなかったの。中学生のときによく。でも、合わなくて」

肩越しにずっと誰かに覗き込まれているような違和感。答えるより先にアイディが察している。ぴったりと寄り添い、言葉にしなくても理解してくれる。だけど、急にできた近すぎる友人にどうしても心を開けなかった。だんだんと干渉レベルを落とし、やがて最低限のモニターだけにしてしまった。

だけど、アイディを持たない者の居場所はない。ベーシックインカムで生活はできるけれど、意義のある仕事も、友人も、恋人もできない。母が亡くなったあと、世界の縁を経巡るようにしてアイディなしでできる職を転々とし、最後に辿り着いたのがこの限界集落の世話係だった。小さな集落は居心地がよかった。永遠の黄昏の村。いつかなくなるまでの、最後の瞬間。だけどここにはまだ居場所があって、仕事があって、梓を必要としてくれる人たちがいた。

「梓晴さんは」

女の子は完璧な発音で梓の名前を口にする。

「梓でいいよ、ここではそう呼ばれているから」

「じゃ、あたしのこともアリスって呼んで」

「すごいね、わたしの名前、発音完璧」

もう何年も呼ばれていないその響きは、自分の名前じゃないみたいでくすぐったかった。

「だいたいの言葉は $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ があるからできるよ。だけどさっき、おばあちゃんが何言ってるかわかんなくて、めちゃくちゃ焦った！」

さっきのやり取りを思い出して笑ってしまった。さしもの $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ も角田さんには太刀打ちできなかったか。

「梓さんはここで幸せ？」

「そうだね、幸せ、だと思う。ここにいたらみんなと繋がれるから。 $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ は、付けている人と $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ の関係はすごく近くなるけれど、他の人との距離が空いちやう気がする。見えない繭の中にいるみたいに」

その繭は、梓と世界を隔てる繭でもある。

いつも何かいらつき、家の中で声を荒げていた父。父に逆らえず、かといって父を信じることもできなかった母。結局、母は梓を連れて父の元から逃げ出した。

生活が落ち着いた頃、二人は $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ を入れた。これで全て上手くいくと思った。けれど、母も梓も $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ に馴染めなかった。生まれたときから $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ を身に付けている人たちに比べると、どうしても学習度が足りない。梓たちは $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ に慣れず、 $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ も梓たちのデータを追い切れない。父の元を離れても、結局、母は正規の仕事にはつかなかった。透明な繭の中には入れなかった。

早くに亡くなった母が、一度だけ父の消息を漏らした。孤立を深め、自分自身の誤謬を認められず、どんどんと先鋭化していった父は、反 $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ テロリスト集団に加わったらしい。最終的にどうなったかはわからない。

$\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ があれば幸せになれるのか。

$\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ がなかったら不幸せなのか。

梓にはわからない。でも、ここで梓は人と人を繋いでいる。透明な繭を越えて、内と外を繋ぐ。 $\bar{A} \bar{I} \bar{d} \bar{d} \bar{y}$ があってもなくても、社会と人は、人と人は繋がれるはずなのだ。望むより先に差し出される答えではなく、コミュニケーションの中で不器用に見つけていく選択肢にも価値があるのだと、梓は信じている。

「見えない繭かあ」

アリスが考えるときの癖なのか、パーカのフードをぽふっと被る。その頭を柔らかく包むように形を変えるフードを見て、それが^{アイデュー}Á l d d yの筐体だと気づいた。

「確かなあ。この子がいたら、それで満足かも。友達も親も、^{アイデュー}Á l d d yより近くなれないっていうか。うーんうーんうーん……じゃあこうする！ XRのこの村では^{アイデュー}Á l d d y禁止。この村に入ったら、^{アイデュー}Á l d d yがなかった時代の人として過ごしてもらおう、ってどう？ 面白そーじゃない？」

勢いよくフードを脱いで、アリスがにかっと笑う。

「ありがとう、アリスちゃん」

「そのためには、みんなのこと、もっと知らなくちゃ。^{アイデュー}Á l d d yがないと、すっごい寂しいんじゃないか、ひとりぼっちなんじゃないかって思ってたけど、けっこうみんな楽しそうだよ」

「そうだね、みんなとても仲良しだよ」

さきほどまで居心地が悪そうにしゃちほこばっていたビジョン・ワンの人たちも、いつのまにか集落のみんなに巻き込まれるように姿勢を崩し、笑い声を上げている。暫くぶりに会う外の人たちが嬉しくて、みんな、とても楽しそうだった。

ふと思いついてアリスに聞いてみた。

「ねえ、逆にわたしも、^{アイデュー}Á l d d yがある世界を体験できるかな？」

アリスが小首を傾げる。

「できる、と思う。梓さん、^{アイデュー}Á l d d y、入ってはいるんでしょ？ だから、XR自体は経験できるはずだし。あ、そだ、アレ使えるかも。わたし、この前、離人症モードっての作ってみたの。あえて没入感を減らす。これが前時代的な感覚が味わえてけっこう面白って話題でさあ。それ使えば、^{アイデュー}Á l d d yとの距離感、いい感じに調整できると思うよ。ほんでもって、ちょっとずつ慣れていけばいいよ」

酔っ払った山岸さんがふらふらと踊り始めた。アリスが笑いながら撮影を始める。

海沿いの小さな村。

二〇〇世帯ほどが寄り集まって暮らしている。道を歩けば、知っている人たちばかり。ちょっとした世間話やお裾分けでなかなか先が渉らないかもしれない。日だまりで丸くなる猫、子供たちが遊んでくれるのを尻尾を振って待っている犬。

港には船が着いたばかりだ。日焼けした人たちが声をかける中、きらきら光る魚を満載にした網が上がってくる。おこぼれを狙って集まってきたカモメたちがうるさい。

